高知県自然観察指導員連絡会会報

ネイチャー高知

No34　2010年1月15日発行

２０１０年度研修会と定例総会のお知らせ

２010年度の総会とそれに先立っての研修会（講演会）を次のとおり開催します。

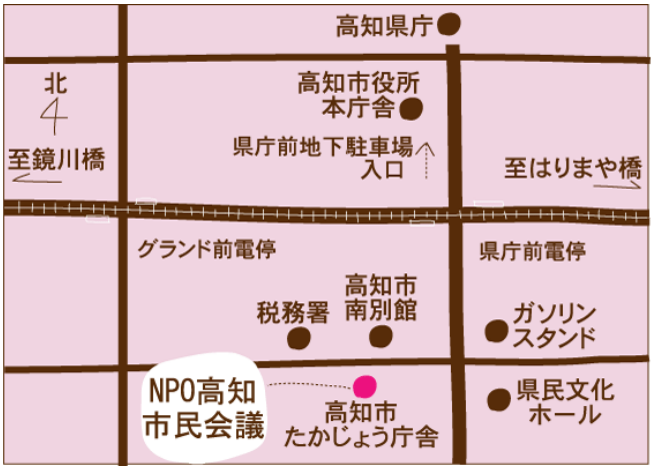
研修会（講演会）

日時　２010年2月13日（土曜日）　午後１時３０分から
場所　高知市鷹匠町２丁目1-43　高知市たかじょう庁舎２階
　　高知市市民活動サポートセンター２階　大会議室
演題　高知のタンポポ・西日本のタンポポ
講師　藤川和美（高知県立牧野植物園研究員）
参加料　無料
※　研修会（講演会）は会員以外の方の聴講も自由です。お誘い合わせのうえ、ご参加ください。

総　会

日時　２００９年2月13日（土曜日）　午後３時から（予定：研修会が終了後始めます。）
場所　高知市鷹匠町２丁目1-43　高知市たかじょう庁舎２階
　　高知市市民活動サポートセンター２階　大会議室
議題　２００９年度事業報告・決算について
　　２010年度事業計画・予算について
　　役員改選
　　その他

総会への出欠の返事を同封の葉書で、2月6日までにお願いします。
また欠席される方は、委任状もおねがいいたします。



次回観察会のおしらせ
スミレと早春の花観察会
3月27日（土曜日）
午後1時30分から
高知市鏡　鏡ダム周辺

大勢の参加で高見山（皿ヶ峰）の保全活動を行いました

高知市高見山の貴重な草原生植生を残すための第１回目の活動を１２月２３日（天皇誕生日）午後１時から行いました。自然観察指導員連絡会の会員の他、これまで観察会に参加された方、高知大学理学部の学生さん、牧野植物園の職員などに呼び掛けたところ、４９名の参加があり、当初予定していた面積を上回る成果を上げることができました。

当日は、稲垣会長から永年の課題であった高見山の保全に取り組めるようになったことについてお礼のあいさつがあり、続いて高知大学石川慎吾教授から、暖温帯における草原として高見山が貴重な存在であること、また、草原を維持するために今回のような活動が必要であることの解説がありました。

セレモニーの後、さっそく作業に移りましたが、想定していた以上の参加者があり、また、刈払機も助成金で購入した１台以外に参加者持参の２台が威力を発揮し、頂上付近など合わせて８か所で当初の予定より広い面積を刈り取った上に、３０分ほど早く作業を終了しました。

今後は、高知大学や牧野植物園と連携し、刈り取りを行った個所のモニタリングを行うとともに、さらに稀少種の生育地の調査なども行い、これからの作業内容に生かしていくこととしています。

当日作業に参加された皆様、お疲れさまでした。今後継続して取り組んでいきますので、よろしくお願いします。

【参加者の内訳】

観察会への参加者	２２名
牧野植物園関係	１２名
高知大学関係	８名
自然観察指導員連絡会会員	７名

わたしのフィールドノート 17　どんぐりを食べよう

田城　光子

わたしが子供だった頃、おやつは野山で調達してくるものが多かった。ナガバモミジイチゴ、フユイチゴ、クワの実、シャシャンボ。シャシャンボはグリーンとも言った。食べると口の中がブルーに染まる。日本人は緑色を青と表現する事がある。信号の青はどう見ても緑だし、「葉っぱが青々と」などともいう。シャシャンボの果実は濃い青だが、グリーンと呼ぶのは何故だろう。緑を青とはいうけれど、青を緑と言うこともあるのだろうか？冬になるとシイの実が落ちる。近くの神社でシイの実を拾い、フライパンで炒って食べる。冬場のおやつの定番であった。いちじょこさん（一條神社の大祭）や県交通中村営業所の裏の屋台でも、炒ったシイの実を売っていた。このシイはたいへん粒が大きくて、県内産のものではなかったと思う。シイの同定はなかなか難しく、樹皮や果実の形、生育場所などを考慮にいれても、わたしにはどうもよくわからない厄介な樹木である。

高知県では、約２０種のどんぐりが見られるという。その中のひとつにシイもある。幡多地域では、公園などに植栽されたものも含めると以下のようなものを見ることが出来る。

コナラ、ナラガシワ、クヌギ、アベマキ、ウバメガシ、アカガシ、ツクバネガシ、アラカシ、シラカシ、ウラジロガシ、イチイガシ、マテバシイ、シリブカガシ、ツブラジイ、スダジイ、そしてクリ。黒尊の１０００mの稜線まで行けば、ブナもある。

いつだったか、新聞で安芸の「かしきり豆腐」というもののことを知った。さっそく取り寄せて食べてみた。見た目にはコンニャクだが、味は甘さをおさえたウイロウという感じだった。作り方を教えてもらったが、レシピどおりにやっても失敗することが多い、水加減がたいへん難しい、と言われた。すっかりひるんでしまい、一度も作った事は無い。その後、別のかたから今度はどんぐり餅をいただいた。これが大変おいしかった。やはり作り方を教えてほしい、とお願いしたのだが、「簡単につくれるものではない」と、なかなか教えていただけなかった。しかしほのかなどんぐりの甘みが忘れられず、自分で工夫してどんぐり餅の作り方を編み出すしかない、と思った。

まず、どんぐりの選定から始めた。どんぐりが落ちていれば拾ってくる。生でかじってみる。次に炒ってからかじってみる。水にさらしてアクを抜く。これをさまざまなどんぐりで、くりかえしやってみた。アカガシやツクバネガシは粒は大きいが、渋みが強い。コナラやアラカシは近くで楽に拾えるが、渋みが強く水にさらしてもなかなかアクが抜けきらない。ウバメガシ、イチイガシ、シリブカガシ、マテバシイの４種が渋みが弱く、炒って粉にして餅につきこめばアク抜きをしなくてもなんら問題がないことがわかった。イチイガシは小粒、マテバシイとシリブカガシは殻が硬くてはがれにくいなどの欠点がある。ウバメガシは海岸にいけば多量に落ちており、殻も薄く実がぎっしりとつまっていて、かすかに落ち葉の香りがする、など、収穫の効率や風味の点で食用として最適だと思っている。

１９９４年。四万十川下流域の河床から出土した巨木は、東北大学大学院の鈴木三男教授によって、アカガシ亜属と同定された。アカガシ亜属には、イチイガシ、アカガシ、ツクバネガシなどが有る。縄文の昔、四万十川にはどんぐりのなる木がたくさん茂っていて、その周囲では人々が寄り添ってどんぐりを食べながらおだやかな暮らしを営んでいたにちがいない。どんぐり餅には悠久の流れ四万十のロマンの味が有る。

わたしのフィールドノート 18　まぼろしのドクゼリ

田城　光子

数年前、植物誌の調査の途中である道の駅に寄ったら、「タラの芽」と称してカラスザンショウを売っていた。たしかにタラの芽によく似ているが、どうも違う。ためしにと、かじってみた。たちまち口の中がひりひりし始めた。すっかりタラの芽と思い込んで購入した人は、なんと刺激の強い山菜であることかと思いながら食したのだろうか？気の毒に思いながら、それでも生命にかかわるような毒草ではなかったのでほっとした。山菜とりの季節には、間違って毒草を食べ、中毒死したり、死なないまでも重篤な状態に陥ったという事故がよくある。ハシリドコロをタラの芽と間違えて食べたというニュースを見た時は、信じることができなかった。地面から芽を出すハシリドコロと、荒い棘のある木の枝先に出てくるタラの芽と、これほどはっきりした違いのあるものを何故？と、不思議でしかたがない。ドクゼリを野生のワサビと間違えて食べ、嘔吐を繰り返し、最後に呼吸も心臓も止まってしまった、という事故もあったそうだ。さいわい一命はとりとめたということだが、これなども植物のことをよく知らない人が、安易に野草に手をだした結果の事故だろう。セリ科のドクゼリとアブラナ科のワサビでは、葉っぱも花もずいぶん違う。食用のセリとドクゼリの区別点である根も、ワサビとはちがうはずだ。そういうことも知らずに食べる、という勇気には頭がさがった。

春になると、わたしも野草摘みに夢中になる。四万十川の川岸で、かじかむ手でセリを摘む。正確には引きぬく。芽が出たばかりのセリとドクゼリは良く似ていて、間違えることがある、と聞いているので、必ず白いひげのような根があることを確かめる。白い根があれば安心する。その一方で、ひそかにドクゼリの太くてタケノコのようだという根が出てくることも期待している。まだ一度もそのような根っこに出会ったことがない。たくさん白い根が集まると、それで佃煮をつくる。ドクゼリではないと教えてくれたことに感謝しながら美味しくいただく。

有毒植物には、なにかしらぞくぞくするような誘惑のようなものを感じる。怖いもの見たさというのもあるのだろうか、ドクゼリへの思いはつのるばかりだった。そんなある日。友人のお父上から「うちの奥の湿地に、昔からドクゼリが生えている」というはなしを聞かされた。裏山の文旦畑へ収穫を手伝いに行った時のことだった。雪のちらつく寒い日。その湿地は冬景色の中で、草は枯れてしまっている。お母上も「わたしはよそから嫁にきたが、嫁入りしたころお父さんから、ここに生えているセリには毒があるので、絶対食べてはいかんと、よく教えられた」という。

やっと憧れのドクゼリに会える!春になって芽をだし、やがて成長して花が咲く日が待ち遠しかった。そしてその季節が訪れた。キチジョウソウやクサイチゴが群生する小川のそばの道を、胸をはずませながら歩いた。この奥に耕作放棄された水田があり、その一角にドクゼリが生えているのか！しかし、たどり着いてわたしは声を失った。「ドクゼリが生えていた」というその場所は、コンクリートでかためられていたのである。せめて周囲にそれらしい植物が見られないか、と血眼になってさがしたが、とうとう見つからなかった。ひょっとするとお父上が他の植物をそう思い込んでいただけのことかもしれない、と思い付近にあったキンポウゲ科の植物などを見てもらったが、やはり違うという。ドクゼリはセリを大型にしたようなものだった、と話された。

今、まぼろしのドクゼリ自生地は、きれいに整地されて緑の芝生とバラのアーチに囲まれたイングリッシュガーデンの中に、絵本から抜け出したような小さなログハウスが建っている。地権者が、以前旅したイギリスの風景を模した家を建てたい、という夢を完成させたのである。わたしには、ドクゼリの生える湿地のほうがより魅力的に思えるのだが、自分の土地ではないのでどうしようもない。高知県植物誌にはドクゼリの記載がないので、高知県にはもともと自生しないのかも知れない。しかしわたしは、ドクゼリに会いたいという夢からなかなかさめることができないでいる。

フィールド紹介

安芸市大山岬周辺

安芸市在住の松本さんに、１１月２８日に開催した海岸の植物観察会の報告を兼ねて、大山岬周辺を紹介していただきました。

松本　孝（安芸市土居在住）

ご存知のように県東部はシオギク、西部はノジギク。講師の先生より、シオギクの分布や特徴などを丁寧に説明してくださり、また野菊は交雑をおこしやすいのに分布は地域地域によってすみ分けをしているのはおもしろいと、各地域の野菊の説明を日本の沿岸をめぐるようにされ、私は頭の中で太平洋側から日本海側へと続く風景を想像しながらめぐることができ楽しかったです。

この日、行く先々で黄色いタイキンギクの花を見ることができました。先生よりタイキンギクは高知県内では普通に見られますが分布に特徴があり、この花を観に県外から来られる人がいることもうかがいました。他にもシロヨメナやアゼトウナなどを観察。シロバナタンポポが咲いていたことに驚きです。

私が感じた「大山岬周辺を代表する風景①」（海岸の植物が彩る風景）

大山岬周辺では、地形も海岸段丘がよくわかるし、へんろ道など人が行きかう歴史（道の変遷など）があるし、テーマによっていろいろな学習が出来る場と思います。

観察会を行った大山岬周辺は、私自身、高知県東部の特徴のお手本のような風景と思っているところで参加を楽しみにしていました。私は普段見慣れている海岸の風景が、地域固有のこの地域にしかない風景であることに、より親しみを感じます。

この日も、もう少し待てば暖かい春なのに、なぜこの寒くなる時期に花を咲かせるのか不思議に思いながら咲く風景を眺めながら、身近に当たり前にあるものがきちんとあることの価値を深めていきたいものとあらためて思ったことでした。

（私の持っている秋の野草の図鑑のシオギクの写真撮影場所は「高知県安芸市」とあります）

私が感じた「大山岬周辺を代表する風景②」（海岸段丘の地形、植生、人が行きかう風景）

野山での拾いもの　　カケスの羽

坂本　彰

野山を歩いていると時々鳥の羽に出会う。まとまって落ちていることもあれば、風切羽や尾羽が１個だけの場合もある。まとまって落ちているのは、多分他の猛禽類などに襲われたのではないかと想像するが、実際にその場面に行きあう事がないので確証はない。その都度拾って持ち帰り、クリアファイルに保存してあるが、それが何という種であるかはっきりしたものは数少ない。「色と形でわかる実物大識別図鑑」という副題にひかれて「野鳥の羽」という図鑑を求め、形合わせ・色合わせで元の持ち主を特定しようとしたが、本人が持っている基本的な鳥の情報量が少なく、なかなかヒットしない。しかも、「若鳥と成鳥では色も模様のパターンも異なる」とあっては、お手上げになる。

そんな中でカケスの羽は判りやすい。特に、雨覆羽は、黒の生地の中に、ブルーのグラデーションをかけたような帯が１０個ほど並んでおりとても美しい。出会うたびに、手帳に挟んで大事に持ち帰っている。

このカケス、子供のころにはその名前を「カシドリ（樫鳥）」と教えてもらった。長いこと、この呼び方は高知の地方名だと思っていたが、この文章を書くにあたって改めて調べてみると、出典は明らかでないものの「平安時代にすでに「カシドリ」の名で知られ、江戸時代から「カケス」といわれるようになった」と書かれたＨＰがあった。古くは「カシドリ」と広範囲に呼ばれていたようである。樫類の実を良く食べることからつけられた名前であろうと思っていたが、「好んで樫の実を食べることからとする説、かしこい鳥の意からとする説がある。」とのことである。名前のつけられ方も、そう単純でない。

ものまねをする鳥としてもよく知られているが、先を急ぐ山登りの途中ではゆっくり耳を傾ける機会もなく、他の動物の声や聞こえてくる音を真似ているのを聞いたことはない。というよりも、相手の方が先にこちらを察知し、「ギャー」という美しい姿に似合わぬ悪声を残して飛んで行くのを見て、その存在に気がつくのが常である。カケスがもう少し美声であったら、この鳥のファンははるかに多かったろうに。天は二物を与えずといったところであろうか。

こんな活動しています

私は平成１７年度より、放課後の子どもの居場所づくりに関わらせていただき、身近な自然を基本に年間プログラムを作成し、児童たちの日常の中に自然とふれあう場を創設してきました。

平成 17 ～１９年度は事業の一環で、２０年度以降は都合により自主的に無理のない範囲でできることを実施しています。プログラムの中に森林学習を組入れ、安芸森林管理署と協働で行った活動がありますが、そのことを林野庁で発表する機会をいただき、１２月 10 日の農林水産省での研究発表会へ行っていました。私のような者が農水省の建物に入ることなどは無いこと、ましてや林野庁で発表するなど無いこと。今回の発表は大変貴重な体験でした。

研究発表会なので講評や賞があるのですが、なんと賞（日本森林林業振興会会長賞）をいただきました。あらためて指導協力してくださった地域の方たちに感謝の思いと参加してくれた児童にとってもご褒美と思い、ありがたい気持ちです。今後も継続できる体制を模索しながら実施していきます。

すみません 顔写真の代わりに仁淀川の水生昆虫を使わせていただきました

（編集者）

はじめまして（新入会員の紹介コーナー）

新しくメンバーになった石川妙子さんの自己紹介です

石川　妙子

初めまして。この度、新に高知県自然観察指導員連絡会に入会させていただくことになりました。昨年の 11 月 27 日～29 日に兵庫県立淡路景観園芸学校にて指導員講習会を受講、無事指導員の腕章をいただいて帰ってきました。

県内の川をめぐり、水生昆虫を拾い集めています。1990 年前後から学校の環境教育が盛んになり、県内の学校へ講師として出向いております。高知県は清流が多く、子ども達と川の生きもの観察をするフィールドに恵まれています。ただ、20 数年川の石をひっくり返していると、川の中の変化が気になります。きれいな水が流れていても礫間はシルトで埋まり、小さな生物の生息空間が減少しているのです。川へ行く機会があれば、川底を足でかき回してみてください。大部分の川で泥が舞い上がります。

子ども達には、「自分たちの川は素晴らしい川だから、自慢してね。」と言いつつ、一方では「川が元気をなくしている」話もします。上流部の人工林の荒廃、ダム、護岸工事、圃場整備、都市化など様々な要因が川を弱らせています。流域全体での対策を考えていかなければなりません。

高知県自然観察指導員連絡会のお仲間に入れていただき、皆さんに教えていただきながら、河川流域の環境を少しでも守れたらと考えています。

また、私の属する NPO 法人環境の杜こうちでは、「環境活動支援センターえこらぼ」を運営しておりますので、自然観察指導員連絡会と協力して高知の環境保護活動を盛り上げていきたいと考えていますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

行事案内

行事名　シンポジウム　四国のツキノワグマ
開催日時　１月２４日（日曜日）　１０時から１５時３０分
場所　　こうち男女共同参画センターソーレ　３階大会議室
主催　　日本クマネットワーク

行事名　シンポジウム　深刻化する剣山山域におけるシカの食害
開催日時　１月２４日（日曜日）　１３時１５分から１６時
場所　アスティとくしま　２階第６会議室（徳島市山城町東浜傍示１）
主催　三嶺の森をまもるみんなの会　　森の回廊四国をつくる会　　徳島県自然保護協会

行事名　シンポジウム　「よみがえれ！竹林」ータケ資源の循環利用に向けて
開催日時　１月３０日（土曜日）　１３:３０から１６:００　＊受付　１３:００～
場所　高知会館　（高知市本町５－６－４２ TEL.088-823-7123）
主催　（独）森林総合研究所

行事名　えこらぼの文化祭　–ミジンコから地球温暖化まで！-
開催日時　２月６日（土曜日）７日（日曜日）　１０時から１６時
場所　こうち男女共同参画センターソーレ（高知市旭町三丁目１１５番地）
主催　環境活動支援センターえこらぼ

行事名　生物多様性国内対話 in 高知・愛媛―みんなでつながる四国生き物ネットワークー
開催日時　　２月２１日（日曜日）　１３時から１７時
場所　高知市文化プラザかるぽーと
主催　ＣＢＤ（生物多様性条約）市民ネットワーク

「ネイチャー高知」の原稿を募集します

「ネイチャー高知」は、高知県自然観察指導員連絡会の機関紙として、１月、７月の年２回発行しています。自然保護に関する主張やエッセイ、フィールドの紹介など何でも結構ですので、どしどし投稿ください。今回から「こんな活動しています」のコーナーを設けました。会員の皆様の活動を順次紹介していきたいと考えています。

「ネイチャー高知」高知県自然観察指導員連絡会会報
NO　34
事務局　780-8075　　高知市朝倉南町3-51-1　坂本彰　方
TEL＆FAX　088-850-0102
E-Mail　akira@baobab.or.jp